

前略勇者様、魔王が 交通事故で亡くなりました

巨道空二
挿絵／なるみすずね



立ち読み版

CHARACTERS

登場人物

アルティア (勇者 ♀)

かつて魔王と戦い引き分けたという人間の勇者。普段は気のいいお姉さん。

久住敏郎 (シロウト ♂)

父の急死によってその会社を継ぐことになった平凡な学生少年。

マリア・カーマイン (秘書課課長 ♀)

先代魔王の忠実な副官。秘書課を束ねるクールで有能な吸血鬼の美女。

黒騎士ジェド (社長室長 性別不明)

常に鎧を着用し素顔を隠している魔王四天王の一人。無口だが強力な魔法戦士。





夢魔將軍マルシェラ・キュビア
(第三營業部部長 ♀)

貿易や奴隷工場、農園経営を担当する四天王の一人。全身フェロモンな女淫魔。

おばば
(専務取締役 ♀)

代々の魔王に仕えている年齢不詳の魔女。昔はすごい美女だったと噂されている。

**獣魔將軍
ガルディア**
(第一營業部長 ♂)

粗野で好戦的だが、圧倒的な戦闘力を誇る頼れる四天王の一人。

**妖魔將軍
ズーム・ブレアー**
(第二營業部長 ♂)

悪魔系の魔物を率いる四天王の一人。魂売買契約、保険などを扱うキレ者美青年。

ビクン、ビクツ、ビクビク——ッ！

ペニスが大きく震えた瞬間、少年の身体の奥でスイッチが入る。急激に高まった内圧が睾丸を、ペニスを震わせ、身体の奥底から欲望の液体を噴出させる。射精が始まった瞬間、全身がしびれるような快感に包まれ、硬直してしまった。

「ううっ、で、出るっ——くううっ」

小さな口の中で、限界まで膨張したペニスが爆発する。少女の舌や唇の甘美な柔らかさに包まれ、小さな手にしごかれながら、性感のうねりが頂点に達していた。

ドピュッ、ドピュッ、ビュルビュルビュル——ッ！

激しく噴出するスペルマは輸精管から尿道口までの経路を圧倒的な圧力で流動し、快感をぶちまける。断続的な痙攣と噴出が快感のパルスとなって身体を震わせていた。

「むぐっ、んっ、んんっ——」

絶頂に達しているその瞬間すらも、銀髪の少女はその手や唇の動きをとめなかった。快感の頂点をさらに高く、長く引き伸ばそうとするかのように舌が、唇が敏感な粘膜を刺激し、指が竿を巧みにしごぎ、締め付けてくる。

そして、何よりも感動的なのは、彼女が苦しそうな表情を見せながらも熱く濃厚なスペルマを飲み下していることだった。細い喉や顎がコクコクと小刻みに動き、噴出する液体を吸い上げるようにして飲み込んでいく。

(うわ、本当に飲んでくれるんだ……苦しそうなのに……)

射精が終わったあとは、丁寧に清めてくれる。濡れタオルで竿を拭き、亀頭を唇と舌で舐めながら残った白い液体を吸い取っていく。すでに射精を終えたペニスは限界を超えた快感に痛いようなせつないような感覚で、彼女の唇から逃げ出したいくらいだ。

「いっぱい、いっぱい出たのです……」

うっとりとした、満足そうな顔にドキリとした。頬も赤く染まり、ロリ顔がひどく色っぽく見えた。ロリータに転んでしまいそうなくらいだ。だいたい、ボンネット帽が後ろにずれて髪の毛が乱れているのも色っぽすぎてよくない。

ほつれた髪が紅潮した頬に幾筋かかかっているのは反則的なエッチさだった。

「たくさん出した割には、まったく小さくならないです。さすがですう……」

「うう、ごめん」

「謝ることなどないです。むしろ誇るべきことで、こちらが嬉しいですっ」

愛しそうにペニスに頬ずりし、キスしてみせる少女の秘部はじつとりと濡れ、ヒクヒクと動いている。彼女もかなり感じていたのは間違いないかった。

「次は、このたくましいものをここにくれるのですよね？」

お尻をフリフリして挑発する少女。ミニドレスのスカート部分は完全にまくれあがって、ほっそりとした下半身を黒いガーターベルトとストッキングが飾っているのがひどくエッ

チに見えた。

「で、でも。大丈夫かな。君、小さいし。壊れちゃいそうだよ」

普段の敏郎からは考えられないほどに凶悪化したペニスは大きく、色といい艶といい自分のものとは思えない。少女の小さな身体には痛々しいほどだ。

「大丈夫。女の身体は、男のものを受け入れるようにできてます」

「そ、それにそのドレス汚しちゃうのも申し訳ないし」

「大丈夫です。あとでちゃんと綺麗にしますから」

馬鹿にされたと思ったのか、少女は不機嫌そうな顔をしている。

「この服も身体も、お客として買ったのだからよいのです。それに……」

「それに？」

女の子が横を向いてしまった。うつむいて目は見えないが、頬が真っ赤だ。銀の髪が軽やかに肩に流れていくのが綺麗だった。

「据え膳食わぬは男の恥です。お、女が求めているのにせぬのは、野暮なのです」

不満そうにちよつと口を突き出して文句を言う様子が妙に可愛い。口調は相変わらずどこか珍妙で微妙に年寄りくさいがそれもいいと思った。

「それに、ここはやる気満々なのです」

「そ、それは……」

一度放出したにもかかわらず、相変わらず股間のものは臨戦態勢だ。ビクン、ビクンと脈拍に同調するかのようには震えているのがなんだか凶悪だった。

「それでは、お兄さんの初めて、もらってしまふのです」

少女がペニスを握ると、それだけで快感が広がり、肉棒が大きく震えた。

「は、初めてって、繰り返さないでよ。恥ずかしいからっ」

ついに童貞卒業なのか。そう思うだけでペニスに血流がさらに集中し、亀頭粘膜が張り詰めてピンピンになっっていく。

「ほんとに立派になつて。見違えました」

「ど、どこを見て言ってるんだよ」

身体の局部だけ褒められているようで実に微妙な気分だった。なんだか恥ずかしくて、彼女の口調が変わってきたのにも気づかなかつた。

「立派なのです。さつきは気持ちよくなつてくれて、すごく嬉しかったです」

にっこりと微笑む少女。大きな瞳が揺れ、長いまつげが頬に影を落とす。

朱唇がこぼれるような笑みを形作るのが魅惑的だ。頬が紅潮しているのが鮮やかで、抱きしめてしまいたくなるのだが、このロリータ少女は少年の急所を握ったままだった。

「これから、ここをもう一度可愛がってあげるのです」

陰囊の裏側から裏筋を指が伝っていく。やわやわと睾丸を包み込むように小さな手が優

しく動き、不思議な快感を呼び起こしていた。

少女がゴスロリ衣装の背中の中のホックを外したのか、胸元が覗けている。まさにふくらみかけ、といった風情のつましやかな乳房が敏郎の視線にさらされていた。

「だから、この身体も思い切り可愛がってほしいです」

ドレスの腕を抜いてしまうと、その下は黒く淫らな下着だけだった。これが娼婦の衣装なのだろうか。唐草模様のレースのブラジャーは形だけで、ほとんど透けている。黒い布地から乳首が透けているのがひどくエッチだ。

「お兄さんはそのままでもいいです。ご奉仕させてくれれば、それで……ひゃうっ」

ブラジャーの上から触れただけで少女の身体が震えた。震える手でブラジャーのホックを外すと、桜色の乳首が少年の指先に直接触れる。柔らかいくせに、指先に周囲の肌とは明らかに違う感触を返してくる。乳輪も小さくてまさに可憐という言葉がふさわしい。

「ここも可愛いよ。ぼくが触れてもいいんですよ」

「うう……好きにするのです。お兄さんのものなのです」

すねたような口ぶりで視線をそらした少女はスカートを大きく捲り上げたまま、少年の腰にまたがってくる。このまま騎乗位にするつもりらしい。

「ちよ、ちよっと、このままするの？」

「お客さまだから、何もしなくていいです」

片手でスカートを押さえたまま、もう片方の手でペニスを自分の股間に導いていく。小さな少女がドレスを半脱ぎで自分にまたがってくる。それはなんだか明らかにマズイ光景であつて。もともと小心な少年の心臓はバクバクしてしまふ。

(や、やばいだろ。これ。ロリータだよ。インコーだよ)

だいたい、彼女の恥丘はツルツルの無毛であつて。第二次性徴が来ているとしてもヤバイ状況には変わりがない。それでも彼女の接近を拒めないあたりは男の情けなさだった。つるんとした恥丘の肉層が覗けているのがむちゃくちゃいやらしい。無垢なものを汚しているという感覚が背徳的な快感を思い切り刺激しまくっている。

びくん。

彼女の未熟なそこに、ついに凶悪な肉槍が触れた。まだいかにも若い女性器に、普段の自分からは信じられないほどの凶暴な勃起がかすかに触れただけで股間から全身に衝撃が走り、お互いの分泌した粘液が一瞬だけぬちゃつと糸を引くのが目に焼きつく。

(し、しちゃうのかよ。ひ、人としてどうなんだ、これ……)

内心の逡巡を見透かしたのか少女がもう一度微笑んだ。したいだろう、という挑発的な笑いだ。小さな身体を、未熟な肢体を自分のものにしたくはないか、傷一つもない柔らかなで滑らかな肌をむさぼりたくないか。そう言っていた。

(ほ、ほしいき。くそつ、ほしいよ。どうせぼくはエロいよつ)

そう思った瞬間、少女が下半身の力を少し抜いた。細い腰がわずかに下降して。瞬間的な接触はすぐに粘膜の密着へとかわっていく。それが彼の初めての始まりだった。

くちゅ——。

かすかな音がした。ミリミリと、まだ小さな女体に男根が進入していく感覚。生まれて初めての感覚が少年の男性器から腰、背中を伝って脳髓に染み込んでいく。

「ん……入り……ます……ああつ、き、きついけど……」

女の子がかすかに顔をしかめると、彼女としているという実感がわいてくる。自分を感じてくれているという感覚が快感に変わり、粘膜の接触が肉槍が突きたった瞬間の点から線へ、そして面へと広がっていく感覚を激しい悦楽に変えていく。

「うわ、入ってく……本当に入ってくんだ……」

「そ、そうです。感じますか。今、大事なところがつながってます……」

少女の狭穴を肉槍が穿ち、肉層を割り広げていく。肉の狭間はすでにたっぷりと蜜を含んでいたけれど、潤滑油があってもきついものはきつい、それだけに気持ちがいい。たっぷり濡れた膣内の潤滑と、それに逆らうような肉壁の摩擦感がたまらない。

ぬぶぬぶ——っ。ぬちゅっ、ずちゅっ——。

「くう、うっ、ううっ。ど、どうですか。は、入ってきます。ここに……」

亀頭の最大直径が飲み込まれた瞬間は背筋がゾクゾクするほどの快感だった。かなりきついようで、両手でスカートを捲り上げて結合部を見せている少女の顔は恍惚としながらも苦痛がまじっているのか、時折ゆがむのが痛々しいと思った。

「だ、大丈夫？ 痛いなら、ぼく……」

「よ、余計なことを気にしちゃだめです。こんな充実感は……久しぶりなだけだから……」
ゆるゆると彼女が腰を下ろしていくと、その分だけペニスが雌肉に飲み込まれていく。当たり前のことだが、それが実に感動的だ。今まさに、自分のモノが少女の女性器を貫いていくのを見ることが出来る。その眺めが快感をさらに倍加させていた。

「ほ、ほんとに大きいです。女泣かせのイチモツなのです、あつ、あくうっ」

可愛らしい膝が大きく曲がり、いよいよ奥に男根を導いていく。スカートを押さええている両手と太ももがプルプルと震えているのは、快感によるものだろうか。頬を真っ赤にしながら少女はせつなげな吐息をつきつつ身体を落としていく。

「お、奥までできました……なんて立派な……。中がいっぱいです」

「うん……わかるよ。奥まで、入ってる。入ってるよっ」

ついに一番奥にまで入った。先端に大きな抵抗が生まれ、竿にからみつく膣肉がキュンキュンと締め付けてくる。女体の複雑な動きが気持ちよく、思わず呻いてしまった。
(し、しちやっただ。こんな可愛い、小さい子と)

もし警察官に見つかつたら、即刻インコーで逮捕されてしまいそうな少女。警官たちの顔は激しい嫉妬と怒りでゆがむだろう。

こんなに綺麗な少女が、ゴスロリドレス姿のまま、流れるような銀髪を乱しながら自分とつながつている。身体の奥底からこみあげてくる達成感が少年を一気に高揚させていく。

「う、動きます。もつと、もつと気持ちよくなつてほしいです」

「うわっ。いきなりそんな……気持ちよすぎるよっ」

ただ彼女の中にあるだけでも大きな快感が、上下動によつてさらに増幅されていく。彼女の締め付けも上下動によつて変化があつて、それがまた気持ちいい。

「んんっ、す、すぐに出してはいけません。まだこらえてください……っ」

言われずとも、彼女が気持ちよくなるまで射精したくはなかつた。さっきのフェラチオのときも結局少年が先に絶頂に達してしまつていた。目の前の少女を気持ちよくしたい。彼女をあえがせ、身悶えさせ、絶頂の嬌声をあげさせたいと思う。

「わ、わかつてる。がんばるさつ……ううっ」

ずぶずぶっ、じゅぽっ。ぬちやつ、ぬちゆうっ——。

腰の奥に生じた快感はみるみるうちに大きくなつていく。上下運動と前後のグラインドを巧みに組み合わせているあたりがさすがだった。少年を快感に慣れさせない多彩な動きが、快感の波をどんどん上に押し上げていく。

(それにしても本当に綺麗な子だよな……)

小柄で幼くはあっても、整った顔。数年後にはすばらしい美女になるだろう。よく手入れされて艶のある銀の髪。ほっそりとした首、薄い肩。柔らかくもすべやかな肌は鎖骨の窪みから胸元に続いていく。

「どうしたんですか？ 触ってもよいのです。ほら……」

少女が腕を伸ばして敏郎の手をとった。ただでさえ小さな手の柔らかな感触にドキリとするのに、少年の手はさらなる魅惑のエリアに導かれていく。

「小さいけど、この胸だって好きにしています……。ん、んん……」

腕を抜いてしまったドレスは、腰のあたりまでずりおちて可愛い胸がむき出しになっている。ふくらみかけの未熟なつぼみは、それでも柔らかくて滑らかで、少年の手に深甚な感動を与えていた。その中心の桜色の突起が掌にくすぐったくて、こすれた感触に女の子が呻くのが少年の中の男をさらに興奮させていく。

「こんなに小さな胸でも、殿方は好きなんですね。んっ、んあっ……」

まだ青さを色濃く残した未熟な果実は、それでも柔らかくてすべすべしていて、触れているだけでも気持ちがいい。感度もいらしく、五本の指を食い込ませるようになるとあえぎ声のトーンが明らかに変わるし、かすかに彼女の動きが揺れる。その反応が可愛くて、この可愛らしい乳房をもっともっと愛撫したくなる。

「はあ、はあ……今度は、む、胸ばかりい……」

掌に触れてくるくすぐったいような感触がいつの間にか存在感を増していた。小さな乳首がそれでも大きさと色づきを増して勃起しているのに気づく。指の間に挟んで転がしたり、つまんでみる感触が楽しく、両方の手で小さな突起を愛撫していく。

「そ、そこも敏感なのに……あ、あまり遊んじゃだめですうっ……」

制止しようとする声も震えていて、ますます彼女を感じさせたくなってしまう。それにはどうすればいいのか。答えはすぐに出た。

「舐めても、いいよね」

「えっ……っ、あっ、はふうっ、はああ——っ、い、いきなり、そんなあっ」

身体を起こして、彼女を抱きしめるようにして彼女の胸に顔をつける。まだゆるやかな丘陵地帯の最高地点にある甘美な果実を唇に挟むようにして吸うと女の子の呼吸がとぎれて可愛らしい呻きに変わる。突然の膣肉のくいしめが気持ちよかった。

ちゅっ、ちゅぶっ、ちゅううっ——。

まるで赤ん坊が母乳を飲むように熱心に未熟な乳房を吸うと、その一つごとに彼女のあえぎが可愛く、締め付けが心地よい。やめられないと思った。

「そ、そんなにされたら身体がしびれてしまっ……だ、だめえっ」

頬を、喉元までもうっすらと桜色に染めながら身悶える少女はいつしか敏郎の頭を抱き



しめていた。愛しいものを抱きしめるかのように。

「あつ、ああつ……な、中で暴れてますっ」

彼女の中で、甘美な締め付けに反応してヒクつく亀頭が、カリが愛液をかき回し、突きまぜる。かすかな水音を感じながら、彼女の細い体を引き寄せるようにして抱きしめ、彼女の動きを感じる。

じゅぷつ、じゅぽつ、ぬちゃつ——。

「あつ、ああつ、か、身体が勝手に動いちやう、あああ——っ」

ドレスのスカートが二人の結合部を隠したまま、複雑な動きを見せる。腕を抜いてしまったドレスの背中ほつそりとした白く輝くような肢体の、妖精のようなボディラインを引き立たせていた。

「あぐつ、くううつ、く、来る。何か来るのぢやつ。ああつ、あつ、ああ——」

彼女の中はすでにドロドロで、二人の肌が触れあうたびに、打ち合うたびに恥ずかしい音が響き、膣肉が竿にからみつくようにして締め付けてくる。

「ぼ、ぼくもつ、ぼくももう出るよつ。もう我慢できないんだっ」

すでにペニスに限界近くの激しい快感に張り詰め、いつ爆発しても不思議ではない状態だ。カウパー氏腺液がだらだらと流れ続けているのが自分でもわかるほどに激しく興奮し、心臓が激しく打ち、全身に熱い血流を送り込んでいた。

「中に、中にほしいのぢやっ。熱くて濃いのを注いでほしいですのぢやっ」
ずぷっ、にゅぷっ、ぬぷぬぷ——っ。

ヒクヒクと小刻みな痙攣を繰り返す肉層が、少女の絶頂に近いのを教えている。彼女の呼吸も驚くほど早く、彼女の心臓の打ち方すらも伝わってきそうだった。

「あっ、あううっ、も、もうだめなのっ。だめなのぢやっ」

彼女の狭穴のうごめきと、ペニスのうごめきが一致しているような気がするほどに二人の動きは一致していた。細い腰の動きと、少年の腕の動きが、二人の呻きが、呼吸がいつの間にか同調していき、快感の限界が波となってやってくる。

びくんっ——。

限界に達した悦楽がはじけ、全身に広がり、爆発する。驚くほどの解放感としびれるような快感が全身を揺さぶり、肉体の隅々にまで染み込んでいく。

ドクンッ、ドクドクドクッ。ビクビクビク——ッ。

内圧が限界を超え、ダムが決壊するかのように熱く濃厚なスペルマが爆発的に噴出する。それは視界に火花が散るほどの激しさで脳髓に肉悦の衝撃を叩きつけた。

「あひっ、ひ、ひああああっ、あっ、ああ——っっ」

熱いマグマを叩きつけられた子宮頸管粘膜が収縮し、膣肉が激しく男根を締め付ける。射精と完全に連動したくしいしめが快感の絶頂にある男根をさらに追い立てていた。

「違うわ。向こうの女性もよ」

首をかしげながら、じっと見つめてくる。整った顔立ちが憂いを帯びていた。

「向こうの女性は、自分を飾っていたんですわ。綺麗に、可愛く……」

マルシエラのまつげに、涙が大きく玉になっていた。

「それなのに、無防備なところを見られてしまったんですもの。ショックだわあ」

（いや、あれは絶対になんか見せていたと思うな）

せつなそうに両手の指を組み合わせてうつむくと美女ぶりがさらに上がった。

「きっと向こうの女性も傷ついているわ。だからかわいそうなんですわあ」

（いや、おぼばはむしろ嬉しそうだったし！ 傷ついたのぼくだし！）

マルシエラは空想の中の女性に感情移入しまくりだ。

「女というのは自分を飾る生き物なの。可愛いと思ってあげてくださいいな」

（前半はすごく可愛かったんだけどな。最後のアレは、アレはあつ）

女は魔物。そんな言葉を改めて思い出した。

「で、マルシエラさんはどうなんですか？ 飾っているの？」

「うふふつ。わたくしは、飾るのではなく磨くんですわ。自分自身を……」

マルシエラたち淫魔は、最初から異性を誘惑するために生まれてくるので、今更飾る必要はないらしい。つまり、彼女は実は老婆などではないということだ。

「そして、もちろんこんなこともできるんですよ、魔王様」
むくり、むくむくっ。

突然男の象徴が元気になって布地を押し上げた。

「考えてみれば魅惑の魔法がかかっているんですけども。肉体操作もできちゃいますの」
少年の肉体に直接魔法をかけたらしい。相手の抵抗力を奪うチャームの魔法の恐ろしさ
だった。戸惑う少年の股間に、舌なめずりする女淫魔の手が伸びていく。

「い、いや、これはちよつと淫魔としてどうなんですか。ちゃんと誘惑してください」
淫魔というのは、基本的に人間を誘惑して、エッチで精気を吸い取る魔物だ。敏郎に誘
惑が効かないというのは、彼女のプライドを傷つけているはずだった。

「考えてみればこんな若くても魔王様ですものね。手段は選んじやいけないみたい」
悩ましげな表情だったが、手段より目的を優先するのはさすがに魔王軍幹部だ。

「い、いや。ぜひ誘惑してください。ぼく、すごく誘惑されたいですっつ」
抵抗する間もなく、ペニスを挿まえられてしまった。ズボンから引っ張り出すときには、
ガチガチに固くなってしまっていた。

「ほーら、肉体を直接コントロールすれば、こんなに簡単ですわ」

「いやいやいやいや、なんだかすっごく損した気分がするんですがっつ」
どうせ勃起してしまうのなら、彼女に思い切りサービスしてもらわなければ損というも

のだが、すでにギンギンに立ってしまったイチモツはしぼむ気配もない。

「うふふつ。気持ちよくしてさしあげますわ。ほーら、いかが？」

ほっそりとした指が男根に絡まるようにして刺激してくると、ペニスの中心が熱くなるような快感だ。指の腹で亀頭をこするだけで恥ずかしくなるほどに固く、さらに大きくなつていく。

「くすくすつ。若くてもさすがは魔王様の持ち物ですわ。立派だわあ」

指で輪を作るようにして亀頭のくびれを巧みに刺激されると勃起して敏感になっている男性器がびくん、と大きく震えてよだれをにじませた。

「くつ。マルシエラさん、いい加減にしないと……」

少年としてはすごみをきかせたつもりだが、夢魔將軍には何ほどのこともなかつたらしい。かえって濃厚な愛撫を引き寄せてしまった。

「魔王様、怒っちゃう？ お仕置きされちゃうのもわたくし、好きですわよお」

受け口の真つ赤な唇が敏郎の耳たぶを捕らえていた。熱い吐息を吹きかけながら、唇でしごくように刺激されてしまうと首筋がゾクゾクする。

ペニスは一度勃起させられてしまうと、もうだめだった。続けざまの快感はとても我慢しきれない。ビクビクと震えながら急角度でそりたつてしまった。

「ああんつ。触れば触るほど大きくなるのね。嬉しいわあ」

優美な腕が巧みに動き、少年の衣服を取り去っていく。力が入らないまま、逆らえないまま衣服を奪われるのは恥ずかしくもあり悔しくもあるが、いかんせん気持ちいい。情けないとは思いつつ、快感はしっかりと伝わってきてしまう。

「ねえ、魔王様あ。わたくしの予算案、承認してくださいな」

彼女の言葉に頷いてしまいたい。彼女に褒められたい。ご褒美がほしい。頭のどこかが叫んでいる。魅惑の魔法は、確かに敏郎に効いていた。

「だ、だめです。判断は報告書をもとに、つ、次の幹部会で……」

「あら悔しい。まだ逆らうのね。いいわ。逆らえなくしてあげるからあ……」

緑の瞳が妖しく光る。彼女はまだ淫魔としての力をすべて使ってはいない。どこまで耐えられるか自信はなかったが、与えてくれる快感も期待してしまう自分がいた。

「それじゃあ、魔王様。わたくしがイイこととしてさしあげますわ」

すつと心地よい感触が離れたかと思うと椅子に座ったままの脚を開かされた。その空間に、マルシエラが膝をつく。

「わたくしの胸、評判いいんですのよお。くすくすっ」

かすかな音をたてて女淫魔の身体を飾っていた紐状の衣服がほどけるようにして脱げていく。解放された大きな乳房がぶるん、と大きく揺れた。残った衣装は下半身を隠しているが、服というよりは豊満な女体に食い込む淫らなアクセサリーといった感じだ。

(う、うわ……上からみると、胸の谷間の深さがすごいっ)

二つの隆起の間の谷間は、密着してしまってもはや亀裂といつてもいいかもしれない。その接触面をのぞけば美しい半球状のふくらみであつて、実に魅惑的な美巨乳といえるだろう。異世界なので単純に比較はできないが、爆乳といえるレベルかもしれない。肌のキメもむちゃくちゃ細かくて、つやつやしているのがエッチだ。

そんな二つのふくらみが迫ってくる。男の欲望の中心に、腰の前部に隆々と立ち上がる男根が、それだけで大きく動くほどの迫力だ。

「くすくすっ。お若いんですね。敏感なおチンポ、可愛い……」

見上げてくる瞳が淫らに輝いている。形のよい鼻の下でねっとり光る唇がかすかに開いているのがいやらしい。

「ここで、魔王様のを可愛がつてさしあげますわ。ほーら、こうやって……」

圧倒的なボリユームが、ついにペニスの先端に触れる。すべすべして柔らかくて、すでにカウパー氏腺液が垂れている鈴口がヒクヒクと反応し、亀頭の張りが増していく。

むにゅっ——。

どこまでいっても芯のない柔らかさが男性器官を包んでいく。二つのふくらみに挟まれる感覚はもちろん初めてで、まったくとした乳房の内圧にくるまれる感覚が心地よかった。そのまま彼女が身体を持ち上げてくるとペニスはさらに深い谷間にもぐりこんでいき、乳

房からの圧力は増していく。

「うっ、ううっ。す、すごい気持ちいい——」

「嬉しいですわ。このままもつと気持ちよくしてさしあげますわぁ」

かすかに間延びしたマルシエラの口調がひどく淫らに聞こえる。長い髪がさわさわと太ももの肌をくすぐってくるのにも感じてしまうほどに、敏感になつていた。

「ほおら、こうしてオツユをぬりぬりすると、また気持ちいいでしょう」

「くっ……こんなっ……」

優美な細い指が赤く張り詰めた亀頭に粘液を塗り広げるだけでも気持ちいいのに、そうして濡らした粘膜が乳房の柔らかさになで回され、包まれてしまうのは身震いするほどの快感だった。

「そうそう。我慢すれば我慢しただけ気持ちよくなりますのよ。くすぐすつ……」

かすかに頬を紅潮させた女淫魔の顔がひどく淫らだった。若い男を誘惑し、その精気を搾り取るのが嬉しくてたまらないみたいだ。そうは思つても、快感は間違いなく本物で、生まれて初めてのパイズリは極上だった。

しゅっ、しゅっ——。

「す、すごい気持ちいいよ。こんなの、初めてだ」

「嬉しいですわぁ。まだまだ先がありますよ、魔王様」

滑らかすぎる肌。まるで芯のない、どこまでも柔らかかな乳肉。とろけるような甘美な果実はその内部に蜜がつまっているかのようによく柔らかかった。豊かな双丘に挟まれたペニスはただらだと粘液をにじませ、潤滑油に不自由しないほどだ。

ビクン、ビクン――。

粘膜のように滑らかな乳房に亀頭がこすられる絹のようなキメの細かい摩擦感。亀頭粘膜はピチピチに張り詰め、柔らかく左右の乳肉に圧迫される竿は血管を浮き立たせていた。快感と興奮が連動し、あふれそうなほどに水位を増していく。

「あらあ。さすが魔王様。わたくしの魔力に呼応しているのですわね」

身体の中によくわからない力が渦巻いていて、なんだかせつない。多分、これがマルシエラの言う、呼応している魔力なのだろう。だが、それは若い男性の感じるどうにもならない性衝動にも似てドロドロと熱かった。

「その気がないようなことを言って、ここには魔力がピンピンですわよ」

「ううっ。触っちゃだめだっ」

乳房に挟まれたままのペニスをもてあそびながら女淫魔が笑う。

「もっともっと気持ちよくなりたいのね。甘えん坊さんですわ」

くすくすと彼女の含み笑う声すらもが淫らで、耳から染み込んでくる。心臓が熱い血流を全身に送り込むのを感じながら、彼女の手が左右から乳房に添えられていく。

「今度は、もつと気持ちいいと思いますわ。よおく味わってくださいねえ」
むにゅ、と優美な指が食い込んで乳房の形が変わる。たわわな果実というのがびったり
の、メロンほどは楽にある肉球が大きく揺れた。

「う、うわっ……な、なんでこんなっ」

いきなり左右からの圧力が変わり、きゅつと激しい締め付けが襲ってくるかと思うと、
まるで波のような快感が左右から交互にやってくる。ビクン、ビクンと震えるペニスから
あふれるようにしてカウパー氏腺液が流れ出る感覚が心地よい。

ただでさえ張りのある乳房の圧力があるというのに、両側から手で押さえることによつ
て乳圧が増してさらに快感は倍増だ。

「うふふっ。左右同時に。そしてずらしてえ。変化がたまらないでしょう?」

「うん、こ、これすごいよっ」

乳房のオーバーハングに手を添えて、下からすくい上げるよう乳房を揺らして乳圧を巧
みにコントロールするマルシエラのテクニクにペニスは波に揺られる小舟のようだ。た
だひたすら翻弄され、悦楽にヒクつき、よだれをたれ流してしまふ。

すりすり、ニユルニユル――。

亀頭からにじみ出た粘液を潤滑油に肌を滑らせる女淫魔。その手が左右から乳房を操り、
思ってもみなかった快感を演出してくる。左右から小刻みに圧力を加えたバイブレーショ

ンは、乳房そのものの揺れと同調して亀頭粘膜を叩く。左右の乳房を一気に上下させる疑似ピストン運動がカリから竿までに均等な乳圧を与えてくるのも気持ちいい。

「くっ、ううっ——」

「我慢することないですわ。気持ちよくなるのは恥ずかしいことじゃありませんもの」

きわめつけは、左右の乳房で逆方向にこすりあげる揺さぶり攻撃だ。通常ならありえない、左右で粘膜のこすれる方向が違う快感に頭の奥が変になりそうだった。

「さあ、今度はこの唇で楽しませてさしあげますわ。」

圧倒的なボリユームで少年を挟み込む両乳房の作る谷間に、トロリと透明な液体が落ちた。それが彼女の唾液だと気づいたときには遅かった。

「うわっ……ほ、本当に唾液まで……」

液体に触れた粘膜がジンジンとうずき、乳房の間で塗り広げられていくとともに粘膜がヒリつくように熱くなる。淫魔の唾液の媚薬効果が、快感をさらに押し上げていた。

「くすくすっ。我慢すればするだけ、気持ちよくなれますわよお、魔王様……」

女淫魔の瞳が輝いた。赤い唇をチロリと覗いた。ピンク色の舌が舐め回す。舌なめずりする様子すらもいやらしくて、その眺めだけでも前立腺のあたりがキュンと収縮してせつない快感を発生させる。赤い唇をピンクの舌が濡らしていく様子はひどく挑発的だ。

「ううっ、うくっ……」



今まさに女性の内部に突入しようとする男性器は大きく反り返り、急角度にそびえたつていた。まるでその手のマンガみたいに長大で、しかも太い。魔王の指輪を受け継いでから、やけに巨大化している気がする逸物だった。

「それじゃあ、いくよ。力を抜いて」

「う、うん……来て。トシロウ君を私の中で感じたいの……」

月光の下に横たわる彼女の脚を開かせるようにして、その間に入り込んでいく。ペニスを手を添え、彼女の秘裂の位置を確認しながら、湯気が立ちそうなほどに熱い男根を突き出していく。

じゅぶつ——。

ペニスの先端が柔肉の狭間に頭を突っ込み、かすかな音をたてたその先の肉裂を探りあてた亀頭が少年の腰の動きとともに女戦士の処女肉を割り裂いた。

「ああっ……」

「くっ、きついな……アルティアさん、もっと力を抜いてみて」

さすがというべきか膣肉の収縮が激しく、彼女に痛い思いをさせてしまいそうだ。片手で上体を支えると、彼女の下腹部にふっくらと盛り上がる恥丘に手を伸ばしていく。

「あ……そこは……くふっ……んっんっ……」

柔らかな繊毛をかきわけながら、彼女のもっとも敏感な器官を探す。恥裂を隠す花卉の

交わる頂点でひっそりと帽子をかぶったままの肉粒を探り出した。

「アルティアさんは、ここは好き？」

ぶるぶると顔を振る女戦士。

「そ、そこは感じすぎちゃうから、ほとんど触ってないの」

「じゃあ、ここで気持ちよくしてあげるのも、ぼくが初めてかな」

たつぷりと潤っている秘裂からすくった蜜を周辺に塗りつける。それだけで年上の女性の身体が大きくうねった。

「あつ……あうっ、い、いきなりいつ……あつ、あくうううっ」

「やつぱり。アルティアさんはすごく感じやすいんだね」

こんなに気持ちよくなれるのに、使わないなんてもったいないと思う反面、彼女のこんな姿をほかの男に見せるのはもっともったいない気もする。

「わっ、わかんないっ。そんな、あつ、はあんっ……」

敏感すぎて自分では触れないというクリトリスをいじられ、女戦士は悩乱した。目も開けていられない様子で、激しく身悶えしながらせつない吐息をこぼし続ける。

「あつ、あううっ、くふっ、ああんっっ」

続けざまの嬌声を楽しみながら腰を突き出していく。先端が入っただけでもきつかった腠肉は敏感すぎる肉粒への刺激とともに弛緩と収縮を繰り返し、タイミングをあわせてペ

ニスを押し込んでいくと断続的な締め付けとともに飲み込んでいく。

「くうっ、は、入ったよ。このまま、奥まで、いくからっ」

思わず呻いてしまった。女体の締め付けがペニスを押しつぶしそうなほどに強い。冒険者として、また剣士として鍛えられた彼女ならではだろう。

ずぶっ。じゅぶじゅぶじゅぶっ——。

「来てるっ、ああっ、トシロウ君のオチンチン、私の中に来てるっ」

新鉢を割る苦痛に顔をしかめながらも、アルティアは押し殺せない快感に喉を震わせる。蜜で濡れた秘花は十分に潤滑されていて、きついながらも男根は小刻みに膣肉に快感を植え付けていた。そして、十分に熟した女体はクリトリスへの刺激で大きな快感を得ながら、少しずつほぐれてきている。

「だ、大丈夫？ 痛くない？」

「す、少し痛いけど、落ち着いてきたから……トシロウ君がいいようにして？」

年上の女性の健気な言葉に頷き返すと、ゆっくりと奥に侵入していく。女戦士のもっとも女らしい部分、彼女が今までどんな強敵にも明け渡すことのなかった門が、今彼女のためだけに開かれている。

ドクン——。

魔力に満ちたペニスが大きく反応した。破瓜の血を味わっているのが少年にもわかる。

処女地に足を踏み入れる快感は、予想以上に大きかった。

「くっ、アルティアさんの中がすごい……っ」

「ん……トシロウ君の、感じるよ……トシロウ君のも、動いてるね」

「ぼ、ぼくもすごく気持ちいいからね。これじゃあすぐにイッちゃいそうだよ」

彼女の奥にたどりつくと、ぴっちりトペニス全体を締め付けてくる密着感が実に気持ちいい。鍛えられているだけあって締め付けも強く、彼女の中の凹凸や襞の感触がすごくリアルに感じられた。

「私の中、気持ちいいんだ。嬉しいな。イッちゃっても、いいんだよ」

きゅっと彼女の中が収縮する。いくつものリングに締め付けられているような不思議な快感だった。二段締め、三段締めなどというタイプの名器らしい。

「痛いのもあるけど、すごく気持ちいいの。トシロウ君、上手なんだね」

正直なところ彼女の敏感さのほうが必要な気がするけれど、褒められるのは嬉しかった。もっともっと彼女を気持ちよくしてあげたいと思う。

「アルティアさんがすごく可愛いからだよ。それじゃあ、動くよ」

そろそろと、最初は慎重に、そして少しずつ腰の動きを大きく、早くしていく。最初はギチギチにきつかった雌肉は少しづつほぐれ、大量の淫蜜に滑りもよくなっていた。

「あっ、ああ……いい、痛いの気持ちいいのっ」

推送を始めた少年には、すでに肉粒をいじるほどの余裕はない。彼女の腰を抱え上げるようにしながらひたすらに腰を使い、肉の杭を打ち込んでいく。

ぬちゅっ、じゅぷっ、じゅばあっ——。

二人の結合部が淫らな音を奏でる。肉が肉を打つ音が夜の空気に染み、嬌声が風を震わせる。月光に照らされながら、二人はひたすらに蜜戯にふけていた。

「ああっ、な、なんで身体が勝手に動いちやうのっ」

「ぼくらが知らなくても、か、身体が知っているからさ……っ」

いつの間にかアルティアの脚が敏郎の腰にからみついていた。戦士として飛び抜けた才能は、エッチにもいかされているようで、ぎこちない動きはみるみるうちにしなやかな、淫らな動きに変わっていた。

細い腰は彼の動きにびつたりとあわせるようにしてうねり、彼女の内部もまたペニスの動きにあわせて収縮と弛緩を繰り返し、快感を高めていく。

「す、すごいな、アルティアさんの中……すごく気持ちいいよっ」

「うれしい——っ。わ、私の中で気持ちよくなってるっ」

快感をこらえきれないのか、アルティアの手が敷布を鷲掴みにしている。彼女の身体はすごく柔軟で、しなやかな動きは波がうねるように自然だった。動きの一つ一つに丸みを帯びた乳房が弾み、しつとりと汗に濡れた肌が月光にきらめく。

はあっ、はあっ、はあっ——。

二人の荒い呼吸が夜風に吸い込まれていく。ここが屋外であることなど、頭のどこにもない。誰かが来るとか、見られているとかなどまったく頭に浮かばなかった。

滑らかで柔らかな肌と、身体の要所を覆っている防具の落差がひどく悩ましい。怪物を一撃のもとに倒した女戦士を組み敷いていると思うと自分が強く大きくなったような気すらしてしまう。

にゅぷっ、じゅぽっ、くちゅくちゅっ——。

彼女のエキスと自分のエキスがまじりあい、もつといやらしい液体になる。かき回され、泡立つ、淫らかな水音が耳をくすぐるのにもゾクゾクする。

「な、なにっ？ ああんっ、トシロウ君の、ヒクヒクしてるうっ」

「あ、アルティアさんの中、すごく気持ちいいからっ」

ペニスがビクビクと彼女の中でうごめいている。瞬間的な硬直を幾度も繰り返す痙攣は、まるで射精直前の快感だった。

「はんっ、あっ、ああっ……き、気持ちいいけど、何か、ヘン……」

「う、うんっ。ぼくらの魔力が、反応してるみたいっ」

ドクン、ドクン、ドクン——。

ペニスに魔力が集中し、アルティアの魔力と交感している。その強さは、初めてのとき

やマルシエラとしたときにも劣らない。女戦士の力が魔王軍の精鋭にも劣らない証明なのかもしれない。

「ああっ、なんだかすごく熱いのっ……も、燃えちゃいそうっ」

「くううっ。そ、そんなに強く締めたら、出ちゃうよっ」

じゅぷっ。ぬぷっ、ぬぷうっ——。

粘膜をすり合わせ、感じあう快感に魔力を触れあわせる快感が重なりあっていく。それは自分の肉体や感覚が一気に拡張される解放感をともなっていた。性感そのものも鋭敏になり、より鋭く、より深い快感が少年の欲望中枢を直撃する。

はあっ、はあっ、はあっ——。

なんだか二人の結合部を中心に世界が回っているような、極端な充実感。自分という人間が彼女との接触によって拡張され、広がっていく。単純なピストン運動がいつしか着弾点をばらしながらの巧みな攻撃に代わり、強弱、速度、深さの変化をつけた波状攻撃になっていた。

「ああんっ、あっ、ああっ……深いの、深いのがいいのおっ……」

クイクイと多段縮めで締め付けてくるタイミングが、いつしか少年の抽送とシンクロしていて快感を倍増させる。彼女自身の腰の動きも滑らかで、女戦士の驚くべき順応性を示している。少年の腰を挟み込んだ脚はむしろ彼を誘導しているようで、淫らかな動きすらも



シャープで美しいと思う。

「すつ、すごい。トシロウ君の気持ちいいの、伝わってくるうつ」

ヒクヒクと痙攣し、淫らな粘液をだらだらと流し続ける粘膜の動きか、魔力の重なりあいがお互いの快感をつないでいるのか。敏郎自身にもわからない快感が波となって押し寄せてくる。

ビクン、ビクン——。

ペニスはどういつ爆発しても不思議はない。それほど快感は高まり、下半身に力を込めて射精を我慢している状態だ。だが、しびれるような快感が下半身全体を覆い始めている。もう限界だった。

「い、いくよ。アルティアさんの中に……射精しちゃうよつ」

「来てっ。トシロウ君のほしいっ。いっぱい、いっぱいちょうだいっ」

彼女の内部も淫蜜を大量に分泌して小刻みな痙攣が始まっている。もうちよつとの刺激で達するはずだった。彼女の快感曲線がその極大値に達しようとしているのを信じ、ひときわ深く、強く。彼女の子宮めがけてえぐりぬく。

「ああっ、あつああああ——。飛ぶっ、飛んじやううっ」

「ぼ、ぼくも出るっ、もう、もう……う、うあああっ」

ドクン、ドクッ、ドクドクドクッ！

もうどちらが先かはわからなかった。激しい快感に二人の体が痙攣し、一瞬にして限界を越えた快感が理性のダムを押し破り、すべてを押し流す。

ドピユツ、ドピユツ、ビュルルルッ、ビクビクヒク——！

体の奥がきゅつと収縮し、睾丸から大量のスペルマを絞り出す。ペニスの痙攣とともに圧力を持った精液が輸精管を内側から膨張させ、のけぞりそうな快感を全身の神経に向けて発信する。

「あああつ、熱いの、熱いの出てるっ。いっぱいくるうっ」

女性器の激しい収縮が粘膜の接触をさらに濃厚にしていると、子宮まで打ち抜こうとするようにスペルマが叩きつけられる。快感と敏感さの極致に達していた子宮頸管粘膜が火傷しそうなほどに熱い精液のシャワーにわななき、うねり、痙攣する。

「くうっ、あつ、ああっ……」

あまりの快感の激しさに、二人とも動くことができない。ただ肉体が痙攣し、ひたすらに快楽をむさぼるのにまかせるしかない。局部どころか全身が溶けていってしまいそうに肉悦のうずきは激しく、そして熱かった。

「ま、まだ出てくるう……私の中、いっぱいになっちゃう……」

白濁した熱い液体と、蜜壺の奥からあふれ出す愛蜜とがまざりあい、結合部からあふれ出す感覚すらもが快感を誘発してしまう。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※盗作・パクリ・転載は厳禁です。無断転載は法的責任を負いかねません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!



二次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



コミックアンリアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!



Prim コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクライシス

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!